

現代日本資料センター 近代日本の社会学者に 関する書誌

竹村英樹
慶應義塾大学専任講師
ライシャワー研究所客員研究員
特別寄稿者



この小文で、主要な日本の社会学辞典の人物情報について解説を試み、それとの比較を通して、私が編者のひとりとして昨年12月に出版に関係した『近代日本社会学者小伝』を紹介したい。

川合隆男・竹村英樹[編] (1998)『近代日本社会学者小伝』勁草書房。19世紀前半から20世紀後半に至るまでの日本の社会学史に関係した140名について、個々人の略年譜・略伝・写真・著作一覧・研究書誌を集めた本である。

日本には主要な社会学辞典は5つある。『新社会学辞典』(1993年、有斐閣)、『社会学事典』(1988年、弘文堂)、『現代社会学辞典』(1984年、有信堂)、『社会学辞典』(1958年、有斐閣)、『社会学辞典』(河出書房、1944年)の5冊である。不思議なことであるが、1960年代、70年代には大型辞典は出版されていない。最近出版された順番に簡単に辞典を紹介し、特に人物項目の特徴を『小伝』との比較でみていこう。

森岡清美・塩原勉・本間康平[編集代表] (1993)『新社会学辞典』有斐閣。この辞典は現在日本の社会学辞典のうち、最も新しく、全1726ページの最も大部な辞典である。日本人の項目は55名でその内32名が『小伝』と共通である。

見田宗介・栗原彬・田中義久[編] (1988)『社会学事典』弘文堂。全1231ページの事典。日本人の項目は269名であり、その内の45名が『小伝』と共通である。分量が少ない分、掲載された人数が多いのが特徴で、ただし、社会学以外の領域の研究者も多く掲載されているので、社会学者と認められる人物は100名弱である。

北川隆吉[監修] (1984)『現代社会学辞典』有信堂。全759ページのこの辞典は35の大項目から構成されている。つまり、項目は50音順に配列されておらず、35の社会的概念を体系的にまとめた「読む辞典」である。ページの端に写真と略暦がついた人物項目があり、日本人は39名掲載されており、その内30名が『小伝』と共通である。人物を調べるには物足りない。

福武直・日高六郎・高橋徹[編] (1958)『社会学辞典』有斐閣。本体977+索引83ページ。戦後初の本格的な社会学辞典である。日本人の項目は53名であり、その内の47名が『小伝』と共通である。文献情報には出版社名が記載されており、配慮が見られる。1958年当時の現役の研究者も載録している。

新明正道[編著] (1944)『社会学辞典』河出書房。日本初の社会学辞典は、共同作業による編集でなく、大半を新明一人が執筆したものとってよい。二部構成で、第一部「社会学」では下位分野別の体系的構成がとられている。第二部「社会学史」では、章立が国別になっており、国別の「総観」の後、かなりの数の社会学者の項目があり、人物辞典としても十分機能を果たしている。日本人は72名掲載されており、その内58名が『小伝』と共通である。明治初期から昭和戦中期までの社会学者を知るには一番良い文献である。

これら社会学辞典(事典)の人物情報には、いくつかの問題点がある。第1に、字数の制約から十分な情報が提供されていない。履歴、業績、研究文献に関し限られた情報が示されるのみである。第

2に、採り上げられる人物が、時代を経るにつれ、入れ替わり、かつての社会学者が忘れさられていく傾向がある。特に、1944年の辞典と戦後の辞典との違いは大きい。第3に、学会の主流にいる大物社会学者にのみ焦点をあて論じる傾向がある。傍流にいる社会学者たちの多様な研究の扱いが少ない。在野の研究者の扱いはさらに少ない。第4に、その社会学者の特定時期の主要業績のみを扱い評価し、学問の形成期や晩年の試みを含めたその人物の業績全体が明らかにされていない。(特に、戦時期の言論が採り上げられていない。)これと関連し、第5に、その人物の通時的な足跡がつかみにくく、学説や研究業績の全体像ばかりでなく、出身地、学校、職歴、交流した人物、sociological convoyなど、その研究人生の背景がみえてこない。最後に、近代日本の社会学の展開をめぐる、国境をこえて活躍した人物への着目が求められる。

さて、上であげた問題点について、『小伝』でどう解決を目指したのか。第1、第4、第5の点については従来の辞典の10倍から20倍に相当する量を記述したため、その人物に関する基礎的な資料を含めることができた。しかし、これでその人物の研究が完了したわけではない。人物の評価は時代や視点によって様々であろう。むしろ、今後さまざまな関心から研究していくうえで役立つように、『小伝』は「書誌」に徹した内容になっている。

残る第2、第3の問題については、具体的にみていきたい。前述した5冊の社会学辞典すべて及び『小伝』に項目として掲載されている人物は15名いる。これら15名は社会学界のビッグ・ネームといえよう。米田庄太郎(1873-1945)、高田保馬(1883-1972)、戸田貞三(1887-1955)、松本潤一郎(1893-1947)、鈴木栄太郎(1894-1966)、田辺寿栄(1894-1962)、蔵内数太(1896-1988)、有賀喜左衛門(1897-1979)、新明正道(1898-1984)、古野清人(1899-1979)、喜多野清一



(1900-1982)、小山隆 (1900-1983)、牧野巽 (1905-1974)、清水幾太郎 (1907-1988)、尾高邦雄 (1908-1993)。

かれら15名の特徴は、2点ある。まず、世代の限定の問題である。米田を除くと、旧制大学を卒業し、大正・昭和戦前期に研究活動を開始して、戦後の新制大学で教鞭をとった世代に限定されている。この世代は、現在も続く「日本社会学会」の設立(1924年)メンバーの世代である。一世代前の建部遯吾、米田庄太郎による「日本社会学院」(設立1913年)、さらにもう一世代遡り、布川孫市、高木正義、加藤弘之らにより設立された「社会学会」(1896年設立、再編後「社会学研究会」)に参画した世代の社会学者たちは、忘れ去られつつある。次の特徴は、東京帝国大学および京都帝国大学の出身者が占められていることである。この点は、前述した第3の問題点(傍流の社会学者、在野の研究者についての扱いの少なさ)を示している。直前で言及した(世代の限定の問題)を無視したとしても、人数は多くないにしても、早稲田大学、日本大学、慶應義塾大学等の私立大学において、自校出身者の社会学者がいる。各大学内においてはよく知られている社会学者(や彼等の研究)も、外では意外に知られていないことも多い。また、自校ですら忘れられている研究者を含め、『小伝』では、こうした社会学者たちを共有財産として再発見し採り上げている。大学以外の社会学者では、都市下層の社会観察を行った松原岩五郎、横山源之助、社会批評家の長谷川如是閑らのジャーナリストや、社会事業家の山口正、志賀支那人、草間八十雄などの地方公務員の潮流に着目し採り上げている。

最後に提起された「国境をこえて活躍した人物への着目」は、外国人の日本社会研究を、近代日本の社会学の展開の中に位置づける必要を説いたものである。幕末・明治に來日し日本社会を観察したC.ワーグマン、G.ピゴーといった報道画家や、E.モース、E.フェノ

ロサなどの御雇外国人、~~韓~~韓国の社会学者である河敬徳、金賢準、中国人の嚴復、費孝通、西欧の日本研究者であるJ.エンブリー、R.ドーア、J.アベグレン、R.ベラー、日系の社会学者タモツ・シブタニが、『小伝』に敢えて掲載されている。彼ら13人は国も世代も違い一律に扱えない。最近の辞典では、戦後の西欧人の日本研究者に関する記述はよく見ることができる。アジア諸国の社会学者の記述も93年の『新社会学辞典』ではかなり採り上げられている。しかし、本稿で指摘した辞典の問題点 - すなわち、当該人物の業績全体が示されず、研究生活の全体像が見えにくいこと、明治期の人物を採り上げないこと - は、外国人研究者についても該当する。

この『通信』の前号で、ゴードン教授は、日本の外にいる人たちが日本を研究する、その理由を創造的に再発見していくことを提起なさった。(日本人が日本社会を研究することは当たり前であるから、日本人の日本社会研究には理由はいらないし、ない。)とは誰も考えない。この提起の答は多様にありうるだろうが、私は『小伝』で試みた方法 - 個々の研究者の人生全体に着目し、複数の人生を並べてみることで、答の糸口がみえてくるのではないかと考える。専門化し細分化された領域の中で自足せず、自分の研究理由を先達たちがどのように格闘し問い続けたのかを知り、その経験を批判的に継承していくことがもとめられている。そのための基礎的資料を集めようというのが、『小伝』の編集理由なのである。

掲載された140人の社会学者の研究と人生を通覧してみると、いくつもの研究テーマの脈を見つけることができる。ここでは、それらを書き並べる余裕は残されていない。本書は現代日本資料センターに所蔵されているので、皆さまも是非手にとってお読み頂ければ幸いである。また、本稿で採り上げた5つの辞典はすべてハーバード・イェンチン図書館に所蔵されている。『小伝』の執筆者たち

は、大半が若手の社会学者である。文献の所在やその人物について、気軽にお問い合わせ頂ければ、と思う。

